

〈書評〉

**前山隆著『エスニシティとブラジル日系人
——文化人類学的研究』**

(御茶ノ水書房, 1996年, xvi+503頁)

森 幸 一

本書は1960年代半ばから30年以上にわたって、エスニシティとアイデンティティの観点から著者が実施して来た〈ブラジル日系人〉研究の集大成の一部である。著者は大学院時代（サンパウロ政治社会学院）にコーネル・テキサス・サンパウロ大学共同の「ブラジル日系人の文化変容に関するプロジェクト」（1965年8月から2年間）にフルタイム調査員として参加、研究生活のスタートを切ったが、その当初から構造機能分析の立場からの「文化変容」論にはかなり批判的なスタンスをとっていた。著者の理論的立場はグラックマン、ミッチェル、エプスタイン等のマンチェスター学派的都市人類学的研究、シュッツ等の現象学そしてギャーツを中心とするシンボリック行為論、エスノメトドロジー学派、さらにはコーヘン等のエスニック・グループの研究等の影響を強く受け「従来の構造機能分析、集団と象徴分析の構造人類学の批判的再考を目指し」、「人間と文化の人類学的研究における個人の復権」（ii頁）を唱えて「現象学や象徴学的社会学の視野を取り入れた〈個人と主観性の文化人類学〉を模索する」（ii頁）というものである。著者の〈ブラジル日系人〉研究の研究枠組（パラダイム）はエスニシティ、アイデンティティとストラテジー、選択と状況解釈、「ひと」概念である。

ここでは著者の研究目的や基本的分析概念をまず簡単に見て、その後には本書の内容を紹介していくことにしよう。著者はまず最初の論文（第一

部・第一章)の中で、従来の異文化接触論を批判し、自身の立場を「接触する具体的個人々のレベルにおける異文化解釈の論であり、同時に自文化の再解釈と状況に適合させた志向的運用、変動する状況に対応させてのアイデンティティの再定義、再編成と操作というドラマチックな体験を生きた人々の研究に焦点」(25~26頁)をあわせていくことであると規定する。著者の中核的分析概念であるエスニシティやアイデンティティはそれぞれ集団という枠組をはずされて「人間分類の認識プロセス」と把握され、特にエスニシティは「文化的か身体的かを問わず、ある属性(単数または複数)を出自を通して得たと自ら見、または他の者を見るという原理」(309頁)を根幹とする「国家社会 State Society 内における人間の分類の一つの在り方」(308頁)、「人の知覚と認識、世界解釈と人間分類の尺度」(309頁)であるとされる。そして「エスニシティにしろ、アイデンティティにしろ、…知覚・認識・判断は現象学的研究の成果が教えてくれるように、本来価値観、志向性を捨象しては考察不可能なものであり、見ることも、認識することも、人間を分類することもすべては倫理性を持った行為、すなわち、Moral Conduct なのであるから、この認識プロセスは同時に本来政治プロセスである」(309頁)とされている。この政治的認識プロセスを〈ブラジル日系人〉を巡る状況の変動とその解釈、その結果析出される生活・適応ストラテジーとの相互関連性の中で解釈していくことが本書に取められた諸論考の課題となる。

著者にとっては、国家社会(Nation State)の内部において、出自を通して獲得した象徴群に意味を付与し、操作し、運用しながら「構造」「体系」を構築していく行為がエスニシティのプロセスであるが、この行為 Conduct を行う主体が研究対象としての人間=パーソン(person)に他ならない。著書のパーソン概念は「社会人類学における構造と個人——“person”概念からの照射」の中で詳細に検討されているが、ここではその「パーソン」観にはデュルタイ、モース、フォーテス、ミドルマン等の影響が認められるとだけ指摘しておこう。本書で対象となるのは具体的に

は戦前移民と戦前二世である〈常民としてのブラジル日系人〉という人間である。

本書は15本の論文からなる4部から構成されている。この諸論文はそれぞれ独立した機会に発表されたものでかなり重複した記述も目立つのであるが、それらは全体としてシンボル運用者としての〈ブラジル日系人〉という〈人間〉の「厚い記述」を構成している。本書の構成は以下の通りである。

第一部 ブラジル社会におけるエスニック日系人

- 第一章 異文化接触と文化変動——ブラジル日系人の事例に照らして
- 第二章 先祖、天皇、移民——サンパウロ州農村における日系人（1908—1950年）
- 第三章 宗教、親族、中産階級——サンパウロ都市部における日系人
- 第四章 エスニシティ、秘密結社、任意結社——社会変動と日系人
- 第五章 日系人と中間マイノリティの問題

第二部 異文化接触と適応ストラテジー

- 第一章 日系人の和魂伯才論——「文化変容」についての一民俗概念
- 第二章 アイデンティティと適応ストラテジー——その歴史の変遷
- 第三章 適応の論理と心理——日本敗戦とブラジル日系人
- 第四章 適応ストラテジーとしての擬制親族——ブラジル天理教集団の事例

第三部 エスニシティとアイデンティティ

- 第一章 日系人のエスニシティとアイデンティティ——認識的・政治現象として
- 第二章 国家・ひと・エスニシティ(1)——1930年代サンパウロ市における日系学生結社
- 第三章 国家・ひと・エスニシティ(2)——1930年代の「第二世」アイデンティティ

第四章 日系人と日本文化——特に日系ブラジル文化と国家観について

第四部 非相続者の倫理・マイノリティの価値観

第一章 「ブラジルのカーネギーとなれ」——裸一貫の倫理と実業家 中尾熊喜

第二章 若き中尾熊喜——ある帰化日系ブラジル人のライフヒストリー

第三章 ブラジル, 日本, 日系人——移民祭と皇族

第一部は日本人移民, 日系人を巡る主要な状況とその変動, そしてその志向的解釈の結果選択された行為が詳述される。第一章では, 異文化接触論に関する著者の基本的立場がまず開陳され, その後で第二章以下の章で詳細に記述されるトピック「エスニック日本人になる」, 「アイデンティティの選択」, 「神々の勧請」, 「集団内多元構造」, 「黒い兄と白い弟」が簡単に紹介され, 構造機能分析に基づく文化変容論的視点からではブラジル日系人の文化・社会変動に関する具体的事象がうまく説明できないと指摘している。ここでは第二部, 第三部でも取り上げられる「エスニック日本人となる」についてのみ取り上げることしよう。これはコーヒー農場に配耕された移民の最初の異文化接触の体験を通じての日本人移民のエスニシティの成立に関するものである。当時のコーヒー農場は人種的な分割統治の原則によって多人種状況を見せており, その中に投げ込まれた移民たちは, その世界解釈を「対照効果 (Contrast effect)」, 「binary opposition」という二項対立概念を構築していくことで開始した。「人間, 事物, 事象を分類し, 認知する範疇が, 多くの場合, 〈日本〉と〈ブラジル〉との対照によって意味をもたされ, かたちをなしてきた」のであり, さらに日常的に〈ジャポネス〉と呼びかけられ, 立ち振る舞いはすべて日本人と扱われ, 自身もそう認識, 行為することで日本から担ってきた日本人意識の延長・継続ではない「エスニック日本人」意識を鮮明にし, 「エスニック日

本人」として自己を再編成していったと解釈されている。この「エスニック日本人」としての状況の解釈・判断・選択・行為の記述・解釈が第一部の中核的テーマとなる。

第二章では1950年代までの農村部居住日本人移民の属性と特質（移民の排出された諸条件——特に共同体、イエ制度）、宗教行動（希薄な祖先崇拜）、地域エスニック共同体の特質（その中核的原理としてのエスニシティとその儀礼的表現であった天皇崇拜シンボリズム）、そして戦時中の好況による経済的上昇（財産、生産手段の獲得）とそれに随伴したイエ類似意識の発生・二世の教育問題・祖国喪失観、祖先崇拜の復活等からの永住主義の析出等が記述されている。特に、この時代は著者の生活＝社会適応ストラテジーとの関連でいえば（この変遷は211頁の図にまとめられている）、短期・中長期の出稼ぎストラテジーに規制されていた時代であり、この帰国を前提にしてのストラテジーに基づく状況の了解や行動が卓越していた。

第三章では、1950年代以降、即ちブラジルへの永住決意以降70年代までのサンパウロ市を中心とする都市部に移動した〈ブラジル日系人〉の心性、階級と宗教帰属、イエ原理の再解釈・操作を通じての適応—社会上昇ストラテジーの析出とその結果発生したキョウダイ（二世）間の階級的文化的アイデンティティと行為の分裂等の問題が解釈される。この当時の〈ブラジル日系人〉の心性は「出自社会に社会保障を求めるような心性を喪失し、ブラジル社会にアイデンティティを求める」ものに変質し、特に家族労働力を集約的に投下（キョウダイ、父子間の連帯）した自営業種を主とする旧中産階級間でイエ意識類似の観念が芽生え強化され、他方で、日本敗戦で天皇崇拜の根拠が喪失することで祖先崇拜や「日本宗教」運動が活性化していったと論じている。

都市移動後のブラジル日系人はキョウダイ、父子間の協力と連帯に基づく自営業種を中心とする家業での中産階級上昇ストラテジーを析出した。このストラテジーの特質は親と年長のキョウダイとの協力による経済的上

昇の達成、そして経済的上昇達成後には年少のキョウダイを大学などの高等教育機関に送り込み、社会的威信を伴う職業を獲得させるというものであった。自営業種型とホワイトカラー・テクノクラート型と名付けられる、この都市居住ブラジル日系人の社会上昇ストラテジーは一世代内で経済的成功と社会的威信の双方を獲得できたものの、この結果、同じキョウダイ間(二世)に中産階級内での階級的文化的アイデンティティの分断を発生させることになったと説明されている(これが著者がいう「黒い兄と白い弟」問題である)。

第五章では、このような社会上昇の結果、中産階級の主体となった〈ブラジル日系人〉の特質がミドルマン・マイノリティという観点から論じられている。そこでは、ブラジル日系知識人等のスタンスがブラジルの支配的政治イデオロギーと同質な国民国家観の立場のマイノリティ不在論であったことにも言及されている。前後するが、第四章では「非組織的社会における結社組織人」と著者が規定する〈ブラジル日系人〉の社会組織化の特質とその変遷の問題が論じられている。ここでの著者の認識は〈ブラジル日系人〉間に過度なまでに存在する任意結社はブラジル・モデルでも日本モデルでもなく「日系人がブラジル社会で直面した特定の状況を自ら解釈し、それに対応し、状況に立ち向かう目的で社会的行為を構築していくためのストラテジーとしての装置」(117頁)であったと解釈されている(この解釈の具体的事例として第二部、第三部で、幾つかの任意結社が詳述されている)。また、著者は〈ブラジル日系人〉の社会組織化の推移を共同体主導型構造から(急激な社会変動下での秘密結社を経て)結社主導型構造へと転換したと指摘、その変化の動因はストラテジーの変化等の内因とともにブラジルのナショナリズム的国家政策(移民同化政策)と日米戦争への日本の参戦と敗戦という外因であったと指摘、外因の重要性を強調している(この指摘は後に「国の論理」と「ひとの論理」として第三部で詳述される)。

第二部では、第一部でのブラジル日系人を巡る諸状況とその解釈を通じ

て析出されたブラジル日系人のエスニシティやアイデンティティ・モデルが記述されている。第一章では特定のシンボル＝民俗概念（1937年から1941年までの和魂伯才概念）へ付与された意味が主体を取り巻く状況の変動によって操作・運用されていく過程が記述され、結論として、この和魂伯才論が自らの人格・資質・人となりを高めるためにブラジル文化から何かを学び取ろうとする視角が欠けており、「明治期日本の和魂洋才論とは異質」なもので、あくまで「自分がどのような種類の人間であるのか」という問いへの解答の一つであったと解釈されている。

第二章では、第一部の状況の解釈、その結果析出された生活・社会適応ストラテジーの変遷との関連において、シンボルの運用者である〈常民としてのブラジル日系人〉のアイデンティティの変遷が概観（アイデンティティ・モデルの構築）される。内容までは紹介できないものの、ここで提示されるモデルは1950年代までの期間ではほぼ時系列的に析出された移民＝非相続者モデル、移民＝客人モデル、移民＝罹災者モデル、移民＝養子・嫁モデル、2世＝だめになった日本人モデル、第二世＝媒介者モデル、2世＝過渡期モデルである（このうち第二世モデルは第三部第二、三章で再び取り上げられる）。さらに60年代以降に出現した新しいアイデンティティとして〈ニセイ〉〈ニホンジン〉を取り上げている。特に〈ニホンジン〉アイデンティティは①ブラジルのシンボル体系の中ではニュートラルで言外の意味を持たないこと②ナショナル／エスニック・アイデンティティとの葛藤・相克を回避でき、しかも「人種」的側面を強調しているという特徴を持ち、日系人間の階級差に根差す旧中産階級日系人間に認められる新しい人種アイデンティティと捉らえられている。

第三章では、第2次世界大戦における日本の敗戦を巡って展開された敗戦認識運動で中核的役割を演じたグループの発行した『週報』（創刊号1946年5月20日、廃刊同年12月31日付第20号）を資料として用いながら、そのメンバーの自己規定や判断の準拠点が日本の出自社会から〈ブラジル社会〉へと移行するありさまが、日本の敗戦を認識する中で「日本の日本

人」から自らを区分し「日系コロニア人」、「日系コロニア」という新しい自己規定を発生させ、「日系人の将来と方向性という面」との関連で「ブラジルの国情・国是」に自らを適応させていこうという論理と心理を発動させていくプロセスとして解釈されている。第四章では、第一部第四章で指摘された「社会的行為を構築するストラテジーとしての装置」という観点から天理教教団信者という特定任意結社成員が天理教教義の中核＝〈理の親子〉関係（縦の組織化）や「横の組織化」としての〈よのもと会〉等を状況に対応して拡大、再解釈しながら、変動する状況に適応するストラテジー構築・利用していったかが論じられている。

第三部は、著者のパラダイムでいえばエスニシティ、アイデンティティそして「ひと」概念を扱ったセクションで、その中心は第二部で概観されたアイデンティティのうち二世アイデンティティの内容や「二世」という〈ひと〉アイデンティティが、状況の変動においてかに相克・葛藤・分裂されていくのが1934年10月、サンパウロ市で結成されたサンパウロ学生聯盟 (Liga Estudantina Nippo-Brasileira de São Paulo) を事例に詳細に検討される第二章と第三章である。第一章は著者の理論的立場とこれまでの記述をコンパクトにまとめた章で、第二、三章の導入部分といった位置づけになっている。第二章では、学生聯盟の社会組織面の特徴が記述され、その特徴を道具手段的・表出的機能の双方を持ち、会員のエスニック枠組内外のネットワークを終結、情報と象徴群を通じて〈ひと〉表象を作り、アイデンティティを析出させた「日系エスニック文化の創造の場」としている。

第三章ではこの〈ひと〉表象、アイデンティティの問題が解釈される。この章で強調されるのは、第1に〈ブラジル日系人〉のアイデンティティの軌跡は Core Identity である National Identity と Ethnic Identity 間、換言すれば「国の論理」と「ひとの論理」との葛藤・相克・調停の政治的認識プロセスであるという点、第2に日本で成人後移住した日本人とブラジル育ち・生まれの「二世」とのアイデンティティの軌跡の質的な差に関す

る点である。前者の、「国の論理」とは「国民国家観や基層文化観に基づいての異質なエスニシティをもつ人々に対する同化策、国家への忠誠と国籍の問題、ナショナリズム等、国づくりのうえでの理念との関連で国家権力とそれによる個人や集団の統制上の原理一般」を指し、「ひとの論理」とは、社会的条件に適応し、それを活用・操作してより人間的に生き抜こうとする個々人の象徴体系・主観的解釈装置一般」を意味するものである。この「国の論理」と「ひとの論理」との狭間にある第二世という〈ひと〉のそれらとの葛藤・相克・調停の試みをこの任意結社が出版した3種の機関誌——『学友』、*GAKUSEI*、*TRANSIÇÃO*——に寄せられた学聯リーダーの記述を資料に解釈したのが第三章である。ここから著者は成人後に移住した者とブラジル育ち・生まれの第二世では前者が「日本性とブラジル性の二項対立 (binary opposition) 的範疇群」を創り上げ、移民としての自己／ブラジルに生活する自己を調停することができたが〈第二世〉の象徴体系の中では日本性とブラジル性が異質な調停不能のものと認識されている。〈第二世〉の〈ひと〉範疇とアイデンティティが調停者モデル、過渡期モデルでの調停のモデルを経て、結局調停不可能と認識されるに至って〈ひと〉範疇とアイデンティティの分裂（純二世、準二世といった）を引き起こしたと解釈している。

第四部は、これまでの〈ブラジル日系人〉という集合的人間の営みを具体的個人を対象に記述解釈することで、著者の最終目標であるシンボル運用者としての「具体的人間」の「ドラマチックな体験」を描こうと意図したものである。ここでは、移民であり、実業家であり、日系マイノリティが生み出した傑出的リーダーの一人であった中尾熊喜を対象としている。

第一章ではまず立身出世主義と苦学力行のモラルの複合体としての〈裸一貫の倫理〉が非相続者としての移民のストラテジーの中にどのように発動するかを、中尾という具体的人間の中では〈カーネギー主義〉という中に発動していったとし、そのプロセスが詳述され、さらにこれが中尾の企業家精神、社会改良主義、愛情論、マイノリティーであったということ、

ユートピア論などどのように関連されていったかをシンボル運用者のシンボルへの意味付与とその運用が具体的に解釈されている。

また、第二章では中尾の実業家となるまでの半生がライフヒストリー法で収集された資料から再構成され、この二章で「ブラジル日本移民の精神史」の一ケーススタディとなっている。この第四部は「パーソンとしての人間について、パーソンとしての人間が試みる実証科学」を標榜する著者の本領が発揮されているセクションである。こうした観点から著者は中尾熊喜を経て、渡辺マルガリーダ、そして三浦鑿という人間の「シンボル運用と主観的体験構築の現場」、いわば《パーソンの民族誌》研究へその研究を展開している。

最終章では、ブラジルの象徴的「日本」、「日本人」像を紹介しながら、ブラジルはブラジル解析のための道具として象徴日本という近代化モデルを構築し、自力で「学び取ろう」としてきたが、日本人はこうしたかたちでの象徴ブラジルを構築して「ブラジル」から何かを学び取ろうとする態度を欠落させ、「援助を与え…学べと言って教えよう」としてきたと分析、日本の発展途上国とのスタンスの問題を批判し、日本人の「(発展途上国からの) 学び取る姿勢」の重要性、その一環としての「象徴ブラジル」を構築し、自文化再考・批判の武器の一つとすることの重要性を主張している。

以上が本書の内容の簡単な紹介であるが、本書から受ける知的刺激は非常に大きい。ブラジルの日系人・社会研究を志す者として著者の研究をさらに展開、深化させる方向性を見出そうとするならば、まず第1に著者の描いた常民としての〈ブラジル日系人〉は戦前移民と戦前の二世を中核とする〈男性〉パーソン・モデルであり、エスニシティとアイデンティティとの関連からの〈ブラジル日系人〉研究の一つの展開は戦後移民、女性、沖縄県出身者移民、混血日系人、沖縄系霊能者等の〈人間〉等のそれらを描き、〈人間〉を対象にし、それらの主体の状況の解釈、シンボルの選択とその操作、運用等を解釈し、新たなモデルを構築し、著者のモデルとの

突き合わせを行い理解を深化させていくという方向性が考えられる。恐らくこうした人間たちの状況解釈、シンボル選択、運用等は著者の描いたものとは異質なもので、過程をたどっており、著書とは異質なモデルを構築することになるだろう。

また、もう一つの方向は常民としての〈ブラジル日系人〉の生活世界を地域コミュニティ等を対象としてインテンシブな調査研究を行うことによってその具体的生活世界に生きる行為者としての〈人間〉の具体像のエスノグラフィーを目指しながら、その中で著者の生活、社会適応、社会的上昇のストラテジー・モデルやアイデンティティ・モデルを精緻化あるいは修正を行っていくことであろう。

[参考文献] 前山隆「社会人類学における構造と個人——“Person” 概念からの照射——」(『社会構造における自己組織性一個と全体の相互連関性に関する基礎研究—』, 静岡大学人文学部, 1990年, 56—80頁)